

民俗資料館だより

March 31st, 2023

KAMO CITY MUSEUM OF HISTORY NEWS No. 30

加茂市民俗資料館

館報 第30号

令和5年3月31日発行

編集・発行

加茂市民俗資料館

「長唄うしろ面」奮闘記

加茂市文化財調査審議会委員

山内 美恵子

(市山 七十梅寿)

1 出会い

私の「長唄うしろ面」との出会いは、昭和57年加茂文化会館の「こけら落とし」公演でした。踊りが進むにつれて「無理無理、でも絶対踊ることはないだろう」と高見の見物を決めた私が、これぞ青天の霹靂か、30年後まさか「長唄うしろ面」を受け継ぐことになるうとは…。



「うしろ面」は、尼僧が後頭部に狐の面を着けて前後に踊り分ける一人二役の変化踊りです。

私が日本舞踊を再開したのは、平成9年、兄弟子の市山七十之助より「来年5月に市山七十梅お師匠さんの追善公演を加茂文化会館で催す」との報告を受けたことがきっかけとなり、平成18年加茂の稽古場が閉まるまで通っていました。

突然の稽古場の閉鎖でしたが、七十梅お師匠さんが加茂で始めた市山流を無くしたくないという思いはずっとありました。いつしか他人事と考えもしなかった「うしろ面」のことを思うようになり、果たして自分に出来るだろうか、新潟まで稽古に通い続けられるかと1年悩んだ末、新潟の市山流宗家へ通うことを決心しました。

2 門弟となる

昔より数え年6才の6月6日に習い事を始めると上手くなると言われています。私もまったく自信のない「うしろ面」のことを心に秘め、平成19年6月

6日、6才の9倍の年で教えを請い門弟となりました。

「うしろ面」が演じられたのは毎年開催される「舞踊まつり」の3年に一度です。平成20年は見送り、平成23年を目標に上演できるように思い切ってお願ひ致しました。覚悟はしていたものの難しさは想像以上、後の狐は前後左右逆、頭で考えるとこんがらがりがり、表の尼僧は若い娘役、物心ついた時から立役専門、人前で女の役をやったことがないのでこれで良いのかと不安で恥ずかしくなっていました。市山の稽古場には冷房はなく、「舞踊まつり」公演間近ともなると2時間汗だくですが、拙い私の為に怒鳴り続けるお師匠さんには、毎回気の毒な思いをさせています。稽古中に「負けるものか」と何度心の中でつぶやいたことか。それでも初演の時はだんだん右を向き、「後面」でなく「横面」になったり、2度目の公演ではくるくる回ってドッコイショと立つ前に滑ったり、散々なこともありました。まだまだ先人の足元にも到底及びませんが、6度目の公演でようやく面白い踊りと思えるようになりました。



市山七十梅寿(舞踊まつり)



3 歌舞伎役者岩井可保世

加茂に「うしろ面」を伝えた岩井可保世の本名は、山下倉松といい、蒲原郡尻上村（現五泉市橋田）の生まれで、加茂町の大昌寺大門付近にあった市川正兵衛酒店の丁稚奉公をしていました。芝居が好きで役者の真似ばかりしているので主人に役者になるよう奨められ、19才にして江戸へ旅立ちました。江戸の名優岩井半四郎の弟子となり、修業に励み、「越後小町」と言われた生来の美しい器量と抜群の芸達者で番頭格になり、役者の最高の地位、上上吉の位を得たとされています。その可保世の得意演目は、今から三百年前、享保元年歌舞伎役者の市山助五郎が大阪で上演した「うしろ面」でした。ところが天保12年、天保改革の役者江戸払いにより、可保世はお里帰りとなりました。（諸説あります）その後、江戸では振りの難しさもあり、消えた演目となりました。加茂へ帰った可保世は岩井糸之助らと加茂芝居を組織して、北は北海道松前から仙台、西は美濃大垣まで巡業し、加茂の芸者衆に「うしろ面」やいろ

いろな所作事も教えました。安政4年4月、可保世の没後も「うしろ面」は加茂の花柳界に踊り継がれてきました。しかし、昭和46年に最後の踊り手だった市川七十梅師匠がなくなり、一度は途絶



えましたが、昭和54年市山七十之助（平成28年没）が復活を望む文

化関係者の熱意と教育委員会の依頼により、昭和38年に撮影された八ミリフィルムと残されていた「振付書」を頼りに六世宗家市山七十郎（平成18年没）演出の下、指導を受け再構成され、よみがえりました。昭和56年加茂市の文化財芸能保持者に指定され、



広圓寺にある岩井可保世の供養墓
側面に「安政四年丁巳四月廿六日」とある。

同年5月10日、東京国立劇場に於ける「市山七十世の会」で市山七十之助は「長唄うしろ面」を



市山七十之助

披露しました。その時、加茂での復活を望んだ文化関係者、文化協会により盛大な壮行会を開き、七十之助を送りだしたそうです。

4 加茂市無形文化財保持者として

見上げるばかりの先人達の芸に少しでも近づきたいと思いながらも裾野でよちよち歩いている七十梅^{なそうめ}寿^{じゅ}（山内美恵子）に文化財保持者の話がありました。

「賞味期限間近のこの歳であと何回舞台に立ち、月を眺めることができるのか」「先の保持者は名人と言われた舞踊家市山七十之助、かたや迷人の煎餅屋の姉ちゃんでもいいのか」と、辞退も考えましたが、文化財審議委員の先生方から「保持者は上手だからなるのではない…」と言われた言葉に気持ちが楽になりました。踊りはともかく、加茂にどうしても残したいと思う気持ちは誰にも負けないつもりです。この重たい私を持ち上げてくださる皆様方の励ましをありがたく頂くことにしました。目指セタキミカ！

最後に、いつも100%全力でご指導くださる市山七十郎お師匠さん。「まだですか」と言い続けてくれた元文化会館茂野さん。色々な資料を用意して下さる社教中澤さん。励まし続けてくれた同門の石附姉妹。公演の度、賛助出演、後見と協力してくれた市山流の先輩後輩達。楽屋の世話をし、見守ってくれる市山七十梅年事、とし子姐さん。お面と頭巾の針仕事をしてくれる長谷川さん。「舞踊まつり」文化会館裏方の皆さん。いつも温かい拍手を送って下さる観客の皆さん。そして忙しい時でも、稽古に通わせてくれた家族に心より感謝致します。ありがとうございました。

館外活動

1 社会科出張授業

期 日 令和4年6月14日 加茂南小6年生
令和4年6月17日 下条小6年生
内 容 縄文時代・弥生時代の社会を探ろう

2 映像で振り返る「懐かしの加茂」

期 日 1回目 令和4年 8月19日(金)
2回目 令和4年11月18日(金)
時 間 午後2時～3時30分
会 場 加茂市立図書館 視聴覚室
参加者 1回目11名 2回目 25名
(新型コロナウイルス感染症防止策により人数制限)

映写内容

- ①「加茂川改修」
- ②「昔を偲ぶ加茂の風景」(本間正氏絵画)
- ③「通水の喜び(水源池完成)」



3 古文書講座

時 間 午後5時30分～7時00分
会 場 加茂市公民館 第1研修室
定 員 新型コロナウイルス感染症防止策により人数制限

【第1回】

期 日 令和4年9月6日
一般参加者14名
講 師 関 正平 氏
(加茂市文化財調査審議会委員長)
テーマ「天保十年の加茂明神拝殿の再建記録」



《講座内容》

加茂明神の幣殿・拝殿は天保10年(1839)から5年間かけ、天保14年(1843)に完成し、遷宮式を迎えている。

天保10年4月に決まった加茂明神の再建は、同年11月の吉日を選んで工事が開始された。本史料はその^{ちようなだ}新立^{おちようなはしめききちよう}て行事の記録「御新^{ちようなはじめ}始規式帳」である。新^{ちようなはじめ}始の式場には正面に神壇があり、両側に大工衆が並んでいる。右側には祭主越中井波の棟梁松井角平等、左側には棟梁塩野歌吉等が列席している。塩野歌吉は加茂町坂ノ下(現松坂町6)に住む大工の棟梁で市域の神社では上土倉の十二神社、石川の貴船神社などを建てている。

また、神事に際し、町庄屋の市川庄丈右、町から浅野家・小国屋・小柳家、御社家の市川氏・有本氏や世話方の古川伴左衛門が参列している。さらに越後寺泊の棟梁遠藤甚五郎もそのうちの一人である。加茂明神の幣殿・拝殿の再建には加茂町近郷近在の職人も多数尽力している。

【第2回】

期 日 令和4年9月13日
一般参加者13名
講 師 高橋 雅弘 氏
(加茂市文化財調査審議会委員)
テーマ 「加茂城跡の社殿群
～明田川徳次郎の新宮建立一件」



《講座内容》

寛政5年(1793)、賀茂明神神主の古川舎人等が新発田藩加茂組大庄屋の明田川徳次郎を相手として役場に訴えた。内容は、明田川徳次郎が、近年加茂城山に神明宮や諏訪社などの新宮を建立したこと、その上加茂明神祭礼に参加する加茂組社人に働きかけて祭礼を妨害するなど、明神社衰退を企図しているため新宮取り払いの命令、加茂明神祭礼への妨害の禁止してほしいことなどを願った。

上の事件から73年後の慶応二年(1866)、明田川徳次郎の孫にあたる千右衛門(のち吉次に改名)が、加茂町で奉加帳を回覧した勸進行為が、町人や明神社に咎められた。祖父の建立した神明宮を修復して、祭礼を再興する目的の勸進と疑われたのである。吉次は、召喚され、全面的に行為の非を認めて、謝罪の一札を町役場に提出した。さらに没収された奉加帳は、吉次本人や関係者の前で火中に投下されたのである。

徳次郎の新宮建立等によってもたらされた訴訟問題は、当時加茂町に混乱をもたらしたようで、後世までその記憶や伝承が町民の間に残っていたことは、史料で見たように町方の徹底した姿勢から伺うことができる。

【第3回】

期 日 令和4年9月20日
一般参加者13名
講 師 佐藤 賢次 氏
(加茂市文化財調査審議会副委員長)
テーマ 「北方村に置かれた家中への御判田」



《講座内容》

新田開発が急速に進み、村高を113石余(寛永5年)から308石余(承応元年)に増やしていた北方村(加茂市北潟)に新発田藩は、藩主が功勞を挙げた藩士に知行俸禄とは別に褒賞として与えた御判田が設けられていた。堀主馬介^{しゅまのすけ}(知行500石)への7反歩、小川小伝次(知行100石)への5反歩、佐治善右衛門(知行200石)への3反歩などである。

ここに掲げた四点の旧北方村名主の小林家文書によってこれらの田は、与えられた家臣が田とその農民を直接支配するのではなく、その田からの年貢を村名主の小林家が藩から村に申し渡された村年貢と同じ基準でそれぞれの藩士(堀氏に米2石8斗、小川氏に1石8斗、佐治氏に1石2斗)に納め届けていたことがわかる。

新発田藩の御判田制は越後諸藩には見られないと外様藩独特のものであった。

4 歴史体験ツアー

期日 令和4年11月26日(土)

コース 加茂市民俗資料館(集合)～水源池遺跡～牛ヶ沢B遺跡～丸山遺跡(二万年前旧石器公園～化石産出地～七谷忠魂碑遺跡～岩野原遺跡群等



5 歴史講座

期日 令和5年1月28日(土)

時間 午後2時～4時

会場 加茂市産業センター

講師 小熊 博史 氏



(長岡市立科学博物館館長・新潟県考古学会会長)

テーマ「遺跡と遺物からみた加茂の旧石器・縄文時代」

一般参加者 46名

《講座内容》

1 はじめに

小熊氏は旧栃尾市出身で大学卒業後、長岡市役所に勤務。その後科学博物館の学芸員となり、現在は館長です。また、新潟県考古学会の会長も務められ、旧石器・縄文時代を主な研究対象としています。

平成11年から加茂市史編纂委員となり、平成14年の丸山遺跡(旧石器時代)の発掘調査、平成28年の『加茂市史資料編4 考古』の刊行など、加茂市史編さん事業に携わってきました。

2 加茂の地形と地質—生活の舞台—

加茂市七谷地区は油田地帯に確認される「七谷層」の模式地として有名です。加茂川流域には河岸段丘がいくつか見られ、下大谷地内では約990万前(新生代中新世後期)の「カモナナタニムカシイトヨ」の化石が発見されました。

3 加茂の旧石器時代—遺跡と遺物—

旧石器時代の遺跡は「丸山遺跡」をはじめ加茂市内で5か所の遺跡を確認しています。

「丸山遺跡」は上大谷の段丘上(標高約95m)にあり、平成13年に後期旧石器時代(約2万年前)の遺物が発見されました。翌14年と15年の発掘調査で、石器約320点が出土し、ナイフ形石器群の様相が明らかになりました。道具をメンテナンスするなどの狩猟活動のキャンプ地、移動の中継地点かと考えられます。

「山王原遺跡」は下高柳の段丘上(標高約74m)にあり、昭和59年に黒曜石製のナイフ形石器が採集されました。その後の分析で産地が長野県和田峠産と推定されています。直接運ばれたのか、物々交換などで伝えられたのかはわかりませんが、遠方との交流を物語る資料です。

4 加茂の縄文時代—遺跡と遺物—

縄文時代(約1万5,000年前～2,500年前)には気候が温暖化するとともに、土器が出現、弓矢の使用や、竪穴住居による定住的な営みが始まりました。加茂市内では46か所の遺跡が確認されています。

加茂川上流の宮寄上にある「水源池遺跡」(標高約150m)で出土した火焰型・王冠型土器は、信濃川流域の火炎土器様式の特徴をよく示しています。黒水の「岩野原遺跡群」(標高50～70m)は縄文後晩期を主とする集落跡で、石鏃(せきぞく)が多数発見されました。一方、平野側の「加茂市役所遺跡」(標高8～9m)で植物食糧とみられる木の実が、また「陣ヶ峰北遺跡」(標高8m)では漁網用の石錘(せきすい)が出土、当時の環境や生業に関わる痕跡と考えられます。

5 終わりに

加茂市の旧石器時代から縄文時代までの主な遺跡や遺物を取り上げながら、人々の暮らしをわかりやすく解説しました。

6 特別歴史講演会

期日 令和5年3月4日(土)

時間 午後2時～午後4時

会場 加茂文化会館 小ホール

講師 坂井 秀弥 氏

(新潟市歴史博物館館長・奈良大学名誉教授)

テーマ 「 地域社会と文化財保護

—地域の文化財を慈しみ、わが町を育む—

一般参加者78名

《講演内容》

1 はじめに

坂井氏は新潟市出身です。新潟県教育委員会で13年、文化庁記念物課で16年間、発掘調査と文化財保護行政に携わり、その後、奈良大学教授として、現在は奈良大学名誉教授・新潟市歴史博物館館長です。

2 文化財保護・信条

文化財を保護していくためには、行政・専門家・地域住民の三者がそれぞれの役割りに従って三位一体で取り組むことが大切である。そのために行政・専門家は調査研究・文化財保護の現場における成果を地域住民に成果をわかりやすく伝えることが重要である。地域住民が地域にある文化財(私たちと過去とをつなぐ大切な財産)の価値に気づいて、地域の誇りや愛着のよりどころとなり、過去の人に共感できることが重要である。主体は地域住民である。

3 弥生時代後期の高地性集落と前中期古墳

(1) 「山谷古墳」(古墳時代前期)(巻町)

1981年11月25日発見(再発見)

前方後方墳 全長37m

(2) 「保内山王山古墳群」(三条市)

1983年確認。山谷古墳の発見の影響・効果

(3) 「古津八幡山古墳」(新潟市秋葉区)

1987年確認。弥生後期の高地性集落。直径55mほどの大型円墳(後の調査で経60m)北陸・新潟では弥生後期後半(法仏期)に遺跡が増加。この時期、新潟平野では丘陵上(高地性)や環濠をもつ防衛的集落が多い。

(4) 「宮ノ浦古墳」「福島古墳群」(加茂市)

1980年代に発見。4世紀ごろの古墳時代前期の古墳か。「宮ノ浦古墳」では弥生時代の土器が出てきたので山の上に人が住んでいたこともわかる。弥生時代後期の高地性集落の存在が推測される。

(5) 「千刈遺跡」(古墳後期)(加茂市)

6世紀の遺跡である。古墳時代後期半ばに加茂川流域の大きな環境の変化が生じたと推測される。

(6) 「中沢遺跡」(弥生時代後期)(加茂市)

弥生時代後期の遺跡である。北陸西部系(法仏式)の遺跡である。



4 越後における律令国家

大化3年(647)に淳足柵が造られ、翌年に磐舟柵が造られる。(北辺政策)

(1) 大沢谷内遺跡(新潟市秋葉区)

役人が数字を計算する時に九九を覚える木簡が出土している。

(2) 行屋崎遺跡(田上町)

土師器・須恵器が出土している。須恵器は7世紀後半から末になると普及する。

地元で須恵器の生産が始まったことが考えられる。また、建物の柱の穴が小さく、配置がやや不規則であることから一般的な農耕集落や官衙ではないことがわかる。

5 加茂周辺の古代の遺跡

8世紀後半から9世紀に成立する遺跡が多数分布している。奈良時代半ば以降、丘陵の近くで傾斜が緩やかな土地に、積極的に水田開発が進められた。

(1) 花立遺跡

「粟生田」と書かれた墨書土器が出土している。三条保内地域にあったとされる中世の粟生田保につながる古い地名がでてくることから農業経営の拠点で有力者の集落と考えられる。

(2) 鬼倉遺跡

川をせき止めた堰が築かれる。水位を上げて水を引いていた用水で、水田開発をしていることがわかる。多数の墨書土器が出土し、特殊な遺物として「和同開珎」の銭貨、石帯がある。

(3) 馬越遺跡

8世紀半ばから9世紀前半に営まれた屋敷跡がある。「三宅」墨書土器の出土から荘園との関連を示している。また、「丈部」と書かれた木簡、石帯などの出土から有力者が関与した集落と考えられる。

6 まとめ

いまの地域社会には生きてきた多様な文化財が息づいている。地域に積み重ねられた営み、それを伝える文化財に対する慈しみの気持ちを大切にす。そして、文化財保護には現代までの地域史研究が十分なされることが重要である。

7 最後に

1980年卒業以来「変わらぬ」母校。今でも当時の景観が保たれており、懐かしさを感じる。文化財保護に通じると思う。



4年度の歩み

1 入館者数《令和4年4月～令和5年3月》

	市内	市外	計	団体
大人	331	777	1,108	1
中学生以下	359	179	540	11
計	690	958	1,648	12

2 資料収集の状況

本年度、下記の方から貴重な資料をご寄付頂きました。お礼申し上げます、紹介させていただきます。

〈寄贈者名及び寄贈品名〉

坂中 春信 様	(加茂市)	民俗資料	2点
谷本 道子 様	(横浜市)	民俗資料	3点
近藤 恵美 様	(加茂市)	歴史資料	1点
吉田 茂 様	(加茂市)	歴史資料	1点
佐藤 進 小池 登様	(加茂市)	歴史資料	10点
金沢理久夫 様	(加茂市)	民俗資料	1点
西村 行呉 様	(加茂市)	歴史資料	15点
大湊 研一 様	(加茂市)	民俗資料	10点

3 レファレンス・サービス及び来館者の声

① レファレンス・サービス (51件)

- ・遺跡から出土した土器で、甕と壺の違いは。
⇒甕と壺との違いは、一般的に甕は物を煮沸するためのもので、壺はものを貯蔵しておくためのもの。
- ・加茂は桐箆笥の生産が全国の70%を占めているが、桐の木はどこから調達しているのか。
⇒箆笥業者によって調達先は異なるが、県内では、県北、津南産が多い。県外では会津。国外では北米や中国からの輸入ものもある。
- ・昭和30～40年代の住宅地図はあるか。
⇒市史編纂室で閲覧できますと回答。
- ・会津兼定作の刀剣について、関連する資料はあるか。
⇒青海神社に兼定が作った刀剣(銘兼定)が奉納されている。兼定と刀剣についての史料(加茂市史文文化財)をコピーした。
- ・剣ヶ峰城の堀切について知りたい。
⇒後日、現地にて説明する。

② 来館者の声

- ・ふらりと立ち寄って道路元標について突然お尋ねしましたが、丁寧にご対応いただきありがとうございました。
- ・幕末戊辰の役に興味があるので、居之隊の展示を面白く読ませていただきました。
- ・よくこれだけの品を集められました。当時にタイムスリップしました。
- ・雪下駄、建具作りの道具などたくさんあり、感動しました。
- ・何でもできる力のある(産業)パワーみなぎる町だったんですね。
- ・加茂軍議と加茂の歴史がよくわかりました。
- ・具体的な道具を見せていただきながら、詳しく教えていただいたことで、子どもたちは道具の使い方について知ることができました。貴施設で学ぶことができ、充実した学習になりました。

令和5年度の事業予定

1 社会科出張授業

- ・対象 小学校6年生～高校生(希望する学校)

2 「語り継ぐ「懐かしの加茂」映写会」

日時・会場・内容 未定

3 古文書講座(仮)

会場 加茂市公民館

日時 9月5日・12日・19日

午後5時30分～7時

- ・内容 未定

4 歴史体験ツアー

日時・内容 未定

5 歴史講座

日時・会場・講師 未定

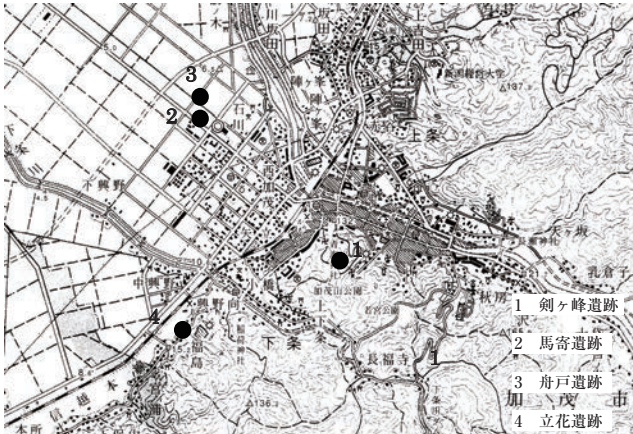
6 特別歴史講座

期日 令和6年3月を予定

会場及び講師 未定

令和4年度遺跡発掘調査について

本年の遺跡調査は、3遺跡を対象とした確認調査と1遺跡で本調査が行われた。



調査遺跡位置図

確認調査

1 剣ヶ峰城跡—中世—

調査地 加茂市大字加茂字宮山内

調査期間 令和4年5月9日～13日

調査原因 学術調査

調査面積 約17㎡

調査の概要 本城で確認される複数の曲輪に3か所トレンチを設け、土層堆積や遺構・遺物について調査を行った。3トレンチで土坑が1基、4・5トレンチから複数の溝状遺構が確認された。山城に関係した遺構の可能性が高い。遺物は出土しなかった。



剣ヶ峰城跡 5トレンチ

2 馬寄遺跡—古墳・古代—

調査地 加茂市大字加茂字馬寄内

調査期間 令和4年10月3日～11月28日

調査原因 店舗建設工事

調査面積 約84㎡

調査の概要 16か所にトレンチを設け、土層堆積や遺構・遺物について調査を行った。三か所のトレンチから古墳時代前期の土師器が多量に出土した。遺物包含層や遺構を識別することはできていないが、周辺には集落が存在したものと推測される。



馬寄遺跡 8トレンチ遺物出土状況



馬寄遺跡 出土遺物

3 舟戸遺跡—古墳・古代—

調査地 加茂市大字加茂字舟戸内

調査期間 令和4年11月24日

調査原因 農業用排水路改良工事

調査面積 約8㎡

調査の概要 4か所にトレンチを設け、土層堆積や遺構・遺物について調査を行った。腐植物層の堆積が厚くみられ、遺跡は確認できなかった。工事による遺跡への影響はないものと判断できる。



舟戸遺跡 1トレンチ

本調査

1 花立遺跡—古墳・古代—

調査地 加茂市下条字福島地内

調査期間 令和4年7月14日～10月26日

調査原因 道路建設工事

調査面積 上層約682㎡・下層約298㎡

調査の概要 上層：令和3年度発掘調査区（約469㎡）の北東、山側に向かう区域を調査した。大小様々な遺構が300基以上検出された（写真1）。その中で、特に注目するのが梁行2間（約5.8m）×桁行4間（約7.8m）以上の規模を持つ大型の掘立柱建物である（写真2）。平面積は50㎡を超えることが推測され、花立遺跡の中では最大の大きさで、集落の中心的建物と考えられる。主軸を南北方向にとり、他の溝などの遺構も同様な方位をとる。また、この建物と近接した位置にある長軸約4m×短軸約2mの大型土坑では、覆土に焼土や炭化物を多量に含んでおり、周辺で火を使用したあと捨てたゴミ穴の用途が推定でき、建物との関連が注目される。遺物は従来の調査で得られたものと同じく9世紀代の須恵器が中心で佐渡小泊窯産が中心である。墨書土器は少なく、「上」「里口」がある。

下層：昨年度の調査区を再度掘削し下層の調査を行った。平安時代の遺構確認面から約50cm下で古墳時代前期の厚さ約30cmの遺物包含層が存在し、多量の古式土師器が出土した。遺構はピットや溝など約100基検出された（写真3）。目立った遺構はないが、後背部に位置する福島古墳群との関連性を検討する上で貴重な成果が得られた。（伊藤秀和）



写真1 上層（平安時代）調査区全景



写真2 平安時代の大型建物跡



写真3 下層（古墳時代）調査区全景

編集後記

今回玉稿をお寄せくださいました山内美恵子先生に厚く御礼申し上げます。

加茂町・加茂市に代々受け継がれてきた芸能「長唄うしろ面」。誇るべき伝統、価値を伝えたいという強い想いを感じます。無理と決めつけずに試行錯誤しながら新たな発見を生み出す。日々研鑽を積み、感性を磨いていくことの大切さを知りました。

文化財に対する慈しみの心とはまさに過去の人とのつながりを感じる事なのですね。

加茂市民俗資料館

■開館時間 9:00～17:00

■休館日 月曜日、毎月第1,3,5土曜日 祝日、年末年始

※ 但し、4,5月は月曜日のみ（祝日に当たるときは次の平日）

〒959-1372 新潟県加茂市大字加茂229番地 1

TEL / FAX: 0256 - 52 - 0089

E-mail: minzoku@city.kamo.niigata.jp

※創刊号～第29号は加茂市のホームページで

ご覧いただけます。